

# 鶏卵ケージフリー義務化の売場から 何が見えるか 《前編》

—卵市場の進化とベターチキンコミットメントの停滞?—

麻布大学 動物応用科学科 動物資源経済学研究室 教授 大木茂

## 米国の鶏卵・鶏肉 AW政策の進捗は？

米国では、鶏卵・鶏肉のアニマルウェルフェア(AW)の政策が進展しています。

鶏卵では、2022年よりケージフリー(CF)卵の生産・販売を最低基準としたカリフォルニア(CA)州、マサチューセッツ州をはじめ、2026年までに10州でCF卵が最低基準となります。特に全米最大の人口を抱えるCA州は、2018年に住民投票の結果、採卵鶏は2020年以降1羽当たり929cm<sup>2</sup>以上の飼育スペースを必要とし、2022年1月よりUEP(米国鶏卵生産組合)ガイドラインが定めるCF基準以上の生産・流通・販売となっています<sup>\*1</sup>。

これは、EUのエンド・ザ・ケージ・エイジ(ケージの時代を終わらせよう)運動により、欧州委員会が2023年末までに提案される予定だったケージ廃止法律案が未だ提案されていない中、注目に値します。

また、CF宣言する企業は米国で134企業、達成率は74%とされ<sup>\*2</sup>、小売大手25社全てがCFへの移行を宣言し、その期限が2024と2026年に集中しています。ただし、それらを満たすには総羽数の6割以上が必要とされ、2023年度末で38.8%と遅れており、最大手ウォルマートや第4位のクローガーが実施延期を発表する一方、マクドナルドは2年前倒しで2025年までにCF100%達成を公表する(2024年2月6日)など、進捗にばらつきが生じています。この背景には、コスト、価格、生産転換、消費者アクセスなど、さまざまな問題があると思われ<sup>\*3</sup>ます。

一方の鶏肉は、米国で1人当たり消費量が最も伸びている畜肉であり、欧州とともに飼育スピードや飼養密度を下げるなどを求めるベター・チキン・コミットメント(BCC)が北米で234の企業(2023年11月時点。フードサービス、食品企業、流通業など)で宣言されていますが、その取り組みは一部で紹介されているのみです<sup>\*4</sup>。

その背景に、米国チキンのAWは、BCCが同時期に始まったベター・チキン・プロジェクト(BCP)を組み込みつつ並行しているため、理解しにくいことが理由の一つと思われます。BCCはAW基準認証団体であるグローバル・アニマル・パートナーシップ(G.A.P.)が、早く成長する品種による飼養が大部分であることを疑問視し、成長の遅い品種への切り替えプログラムを作成、小売のホールフーズマーケット(WFM)がこれを使用して2024年までに早い成長の品種から脱却を約束したことに始まり、BCCとポリシーが類似しています。気になる点は、WFMを含む多くの小売企業による早い成長品種からの脱却の動きが緩やかに見えることです。

また、2023年11月に米国有機鶏卵・肉用鶏の詳細基準が定まり、2024年から施行されていますが、屋内・屋外面積基準は2028年いっぱいには準備期間とされています。今後、有機鶏卵・鶏肉の基準が事実上厳しくなると見られるため、有機商品の変化やそれに伴う他商品の位

置付けも変化が予想されます。

## 筆者による現地視察から 予測する今後の動向は？

こうした経緯から、前述した問題意識を持って、筆者は2023年末から2024年年初にかけて、米国C州ロサンゼルス（LA）<sup>＊5</sup>地域で、AW食品の流通視察を行いました。その結果、大筋の結論は次の通りです。

### 鶏卵について【概論】

LAのほとんどの大手小売企業はCF卵をプライベートブランド（PB）として白玉を中心に潤沢に販売しており、CF化は既定事実になっています。品揃えは、CF、フリーレンジ（放し飼い、FR）、パステウライズド（Pasture Raised）<sup>＊6</sup>、放牧育ち、PR）が存在し、CF価格は価格統計で見ると、ケージと比較し高価格で販売されています。ただし、一部で低価格で販売もされています。価格競争以外の要因（技術革新・投資効果など）も推察できます。なお、WICプログラム（女性・

乳幼児特別栄養補助プログラム）受給者（2022年時点で米国乳幼児の39%を占める）の購入に30州がCF卵を認めるなど、消費者のアクセス改善は進んでいます。

また、米国有機は大規模化も進んでいることから、有機畜産も工業的として、土壌の健康・家畜福祉・労働者の公平性などの総合的取り組みを重視する再生有機認証などの新しい動きも見えます。

### 鶏肉について【概論】

抗菌性物質不使用肉（NAE、ABE）<sup>＊7</sup>が50%のシェアをもち、統計では慣行飼育、NAE、有機3種類の価格が示されています。また、NAEは多くの場合、植物性飼料給与（VF）を伴った飼育のようです。

こうした状況で、遅く育つ品種（スロウグロウス）飼養の商品は限定的ですが、2023年1月にBCP認証マークが登場したことで、今後の動向が気になります。



次章から、鶏卵と鶏肉に分け、現地流通視察の詳細と筆者による考察を述べていきます。

\* 1 California Health and Safety Code, Division 20, Chapter 13.8 Farm Animal Cruelty 25990-25994.

\* 2 Egg Track 2023 Report

\* 3 USDA, egg market overview

\* 4 朝日新聞GLOBE+、普段食べているプロイラーは病的？「ベターチキン」に初めて切り替えた大規模業者、2023.7.12.によると、ヨーロッパ・チキン・コミットメント(ECCC)は2022年に認証マークが定められ、ノルスク・キリング社が遅く育つ品種に全て切り替え、世界で最初にこれに適合し、マークを取得して商品に添付していることが紹介されている

\* 5 ロサンゼルスのうち、トランス、ローリングヒルズ、ロングビーチなどを含むエリア、約40企業90店舗の視察

\* 6 2020 米国チキン会議、National Chicken Council/NCC

## ケージフリー（CF） 鶏卵の価格と商品構成

### 1. CA州における位置付けと鶏卵販売の特徴

CA州では2022年からケージ卵は生産・販売できません<sup>＊7</sup>。ケージ卵のない売場は成り立つのか、消費を控えていないかが当面気になります。

### (1) ケージ卵のない商品展開…飼養スペースの違いを軸とした商品構成

主力商品は日本で「平飼い」に相

当するCF卵です。これは施設形態で異なりますが、最低929cm<sup>＊8</sup>以上の飼育スペースを必要とします。主力小売では、これらCF卵はまずPBで提供されます。商品は次のような特徴を組み合わせで展開されています。

一つめは、行動の自由（CF、FR、PR）で、CFを最低基準としてより広いスペースで飼養する卵の商品も多くあります。二つめに、飼育方法・餌の特徴です。有機、カーボンニュートラル、GMOフリー、植物由来飼料など、さまざまです。

三つめは、栄養添加・低温殺菌処理、品種の違いなどです。オメガ3は日本でもおなじみですが、パステウライズド（Pasteurized）<sup>＊9</sup>（低温殺菌済み）は生食でも安全をうたっています。これらの組み合わせで品揃えされ、付随して認証マークが付加されます。表1に鶏卵の種類、表2に一例としてある自然食品強化小売店の商品展開の一部を示します。また、AW認証マークとしては図1に示す3種類が多く確認されました。

### (2) CF間での競争

表1 鶏卵の種類（カリフォルニア州ロサンゼルス地域）

サイズ	M、L、エクストラL、ジャンボ
色	白、茶、青
商品ラベル	小売業 PB、生産企業
飼養スペース	ケージフリー（平飼い）、フリーレンジ（放し飼い）、パスチャーレイズド（牧草育ち）
農業、環境、品種	オーガニック、リジェネラティブ（再生）、ヘリテージ・エアルム（HH 在来種）
飼料、栄養、殺菌	植物性飼料、GMO フリー、大豆やコーン不使用、オメガ 3、パスチャライズド（低温殺菌済み）
アニマルウェルフェア認証	Certified Humane (CH)、American Humane CERTIFIED (AHC)、Animal Welfare Certified (G.A.P.)

表2 自然食品強化小売店の鶏卵Lサイズ1ダースの品揃え

飼養スペース	生産方法	色	PB	有機認証	AW 認証	栄養添加 他の認証など	屋外飼養スペース	価格 (ドル)
ケージフリー		白	PB		AHC			3.99
ケージフリー		茶	PB		AHC			3.99
ケージフリー		茶	PB		AHC	オメガ 3		4.49
ケージフリー	オーガニック	茶	PB	USDA 有機	AHC			4.99
ケージフリー	オーガニック	茶	PB	USDA 有機	AHC	オメガ 3		5.49
フリーレンジ		茶、青				HH		7.99
フリーレンジ	オーガニック	茶		USDA 有機	AHC	オメガ 3 大豆・コーン不使用		5.99
フリーレンジ	オーガニック	茶		USDA 有機	CH			5.99
フリーレンジ	オーガニック	茶		USDA 有機				6.99
フリーレンジ	オーガニック	茶	PB	USDA 有機	AHC		21.8sq.ft / 羽	4.99
フリーレンジ	オーガニック	茶		USDA 有機			21.8sq.ft / 羽	6.99
パスチャーレイズド		茶	PB		AHC	GMO フリー	108sq.ft / 羽	4.99
パスチャーレイズド		茶					108sq.ft / 羽	7.99
パスチャーレイズド	オーガニック	茶		USDA 有機				6.49
パスチャーレイズド	オーガニック	茶		USDA 有機	CH		108sq.ft / 羽	6.99
パスチャーレイズド	オーガニック	茶		USDA 有機	CH			7.29
パスチャーレイズド	オーガニック	茶		USDA 有機			108sq.ft / 羽	8.49
パスチャーレイズド	オーガニック	茶		USDA 有機 再生有機	CH		108sq.ft / 羽	6.99

※1 ケージフリー：「ケージ以外全て」ではなく、日本の「平飼い」の意味（0.0929㎡/羽などの規制）

※2 オーガニック基準（屋内約1394cm<sup>2</sup>、屋外約2787cm<sup>2</sup>。2024年1月施行、2028年いっぱい猶予）

※3 21.8sq.ft=約2.03m<sup>2</sup>、108sq.ft=約10.03m<sup>2</sup>（記載有のみ）

※4 最下段のみ別小売企業商品

※5 PBは同小売業のブランド、空欄はナショナルブランド

C F 卵は飼料効率などの理由から PB の多くは白色ですが、基準とされる U E P のガイドラインには「アウトドア・アクセス（屋外アクセス）」はありません。そこで、ある自然食品小売は屋外アクセスを



図1 主なAW認証マーク

左から、Certified Humane (CH)、American Humane CERTIFIED (AHC)、Animal Welfare Certified (G.A.P.)



図2 屋外アクセスのマークによる差別化

必須とすることで、結果として差別化をしています（図2）。また、表2にあるように、オーガニックでもC F (C Fの記載はない)、F R、P Rが選択でき、有機鶏卵間の競争も見やすくなっています。また、コーヌコピアという団体が全国の有機鶏卵を5段階評価しており、そこで最高ランクが付いた鶏卵と表示する商品もあります。また、同じく表2にあるように、F Rは21・8 sq ft (約2・03 m<sup>2</sup>)、P Rは108 sq ft (約10・03 m<sup>2</sup>)と、1羽当たりの飼育スペースをパッケージに記載する例が多くあります。これは、F RやP Rの法的根拠がないことから、認証団体の規定

表3 代表的な小売における鶏卵の品揃えと価格（ドル／1ダース）

飼養スペース	色 サイズ	PB	栄養添加	小売 A	小売 B	小売 C	小売 D	小売 E	小売 F	小売 G
ケージフリー	白・L	PB		2.49	2.83	3.49	2.99	2.99	3.99	3.99
ケージフリー	茶・L	PB		2.59	4.84		4.99	3.29	3.99	3.99
フリーレンジ	茶・L	PB				4.99				
フリーレンジ	茶・L				6.14	5.99	5.99			
オーガニック	茶・L	PB		3.93	5.64	6.19			4.99	4.99
オーガニック	茶・L	PB	オメガ3					4.49	5.49	5.49
オーガニック	茶・L						5.99			
オーガニック・フリーレンジ	茶・L	PB						3.99		4.99
オーガニック・フリーレンジ	茶・L			5.00	7.24	6.42	6.99		5.99	5.99
バスチャーレイズド	茶・L	PB						4.49	4.99	4.99
バスチャーレイズド	茶・L			5.98	7.29	7.42				7.99
オーガニック・バスチャーレイズド	茶・L	PB				6.99		6.49		
オーガニック・バスチャーレイズド	茶・L						8.99		7.47	6.99

※1 調査は表1に同じ

※2 PB以外は最安アイテム価格。A～Dは一般的小売、E～Gは自然食品強化小売

※3 各小売店はそれぞれ複数店舗における平均価格（一般的値引き含む）

の数値を用いており、こうした数値表記は消費者協会などによる優良誤認を防ぐ取り組みによるところが大きいと思われる。

**(3) 一般的な鶏卵価格はケージ卵より高額なCF卵の価格に**

表3に、主要な小売における鶏卵の種類ごとの価格を示します。

CF化により、CA州の鶏卵価格全体が上昇していることは間違いありません。米国農務省（USDA）統計では、米国の2023年11月から2024年2月までの17週の1ダース、ケージ卵価格（白・Lサイズ）

1・58ドルに対し、CF卵（茶・Lサイズ）は2・99ドルと、1個当たり12セント高くなっています。視察で訪れた店舗のうち、一般的な小売60店舗の平均価格（PB・白・L・1ダース）は、3・04±0・77ドルで、このうち1ドル台はウォルマート、ターゲット、ウインコフーズ、アルデイで見られました（1ダースパックのみ）。ただし、上記から除いた高級・こだわり系や東アジア食材系、ラテン食材系の小売では4ドル台も少なくありませんでした\*。最大手小売のCF・白は、視察した7店舗中3店舗で1・80ドル、2店舗で2・78ドル、3店舗で2・98ドルで、1・80ドルは同一業態ではないため、競合対策の価格設定と見られます。なお、最も安い店舗は、デイスカウント系小売の1・50ドルで、これも3店舗中1店舗での価格でした。

CF化による価格上昇で鶏卵消費の減退が懸念されますが、そうした統計データは今のところ見当たらないため、引き続き注視が必要です。ただ、1人当たりの年間鶏卵消費量は全米で約280個程度（2022

年↓2023年で減少）なのが、CA州では339個という資料もあります\*<sup>10</sup>。

価格と消費に関しては今後の調査課題としますが、米国のある動物擁護団体の役員からは、「必需品なので消費が減ることはないだろう。しかもCF化のコストアップはわずかであるという資料もあるので、本来CF卵はもっと安くなっている」という指摘をいただきました。

**(4) CF化を可能にした背景と大手企業のシェア**

1ドル台で販売する小売には最大手小売を含め少なくとも4企業があり、倉庫型小売の1ダース換算を含めると5企業になります。これは、CFといえども低価格購入機会があることを意味します。CFへの切り替えに混乱もなく、1・8ドルでも販売可能なのはなぜでしょうか。小売が利益度外視で客集めの価格設定にしている可能性も否定できませんが、合理的理由として次の二つが考えられます。

一つは、CF生産体制が整うことで、規模の経済や技術向上によるコ

ストダウンが働くようになった可能性です。具体的には、施設の大規模化による各種の効率性向上と飼養技術向上による飼料・商品化率の向上、ロス率低下、衛生管理の効率化などです。もう一つは、リスク回避生産施設の活用が影響した可能性です。コンビタイプやハイブリッドタイプと呼ばれる施設は、エンリッチドケージにもエイビアリーにもなる鶏舎です。こうしたコンビタイプの鶏舎を導入し、状況を見ながらケージ（エンリッチド）と平飼い（エイビアリー）を使い分けて需要に応じた生産でコストアップを極力抑えた可能性です。コンビタイプはUEPでは禁止しておらず、ホームページ上でもCFの一形態として紹介しています。英国の鶏卵協会や多くの動物擁護団体はこれらをケージと分類しているほか、大手スーパーのクローガー（ラルフス）も、コンビシステムはケージからCFへの移行には有用だが、CF卵供給者にはオープンなエイビアリーシステムを求めるとしています<sup>\*11</sup>。

米国最大生産者カルメイン・フ

ーズ（4551万羽<sup>\*12</sup>）では、2023年後半26週間の1ダース販売単価が、ケージ一般卵1・358ドルに対し、特殊卵（CF卵を含む）は2・227ドル、飼料コストは1ダース0・554ドル、直近3カ月間でCF卵販売は収入全体の30・4%を占めるとしています。価格比で羽数換算すると20・9%となり、CF羽数は932万羽程度と推定されます。これは、日本の最大手採卵企業1社分に相当します。カルメイン・フーズはこの1年半にCF販売構成比を6・3%、羽数で4%、約170万羽増加させたこととなります。私たちは、米国におけるCF化のスピードとポリウムを認識する必要があるでしょう。

**(5)カーボンニュートラル、リジェネラティブ（再生可能）有機そして透明性**

新しい取り組みを三つ紹介します。一つめは「Kidstar<sup>キップスター</sup>」です。2022年12月に大手スーパー一つであるラルフス（クローガー系）のPBとして販売され始め、次に挙げる①⑦の特徴を持っています。

- ①カーボンニュートラル認証…生産に際し温室効果ガスの排出を限りなく減少
- ②養鶏の革新的ビジョンの提供…アップサイクル飼料使用でトウモロコシ・大豆の使用を大幅減
- ③アップサイクル飼料の使用で温室効果ガス排出削減に寄与
- ④より良いAW…鶏は森林に生息するもので自然な行動がとれるように設計
- ⑤雄鶏の飼育…雄の雛を肉用鶏として育てる（雌成鶏も同様）
- ⑥きれいな空気
- ⑦圧倒的な透明性…24時間365日のライブカメラ設置

この生産方法は、2017年にオランダで開発されましたが、全米では始まったばかりで、LA地域小売店ではラルフスの2店舗（5店舗中）しか見かけませんでした。従って、今後は不透明ですが、キップスター1羽当たりの飼養面積は、屋内910・45cm<sup>2</sup>＋屋外938・32cm<sup>2</sup>と、スペースから見ればCFと有機の間位置付けられますが、そのほかのコンセプトはきわめて未来志向です。



図3 再生有機認証マーク (ROC)  
鶏卵、鶏肉以外にも貼付されている

二つめは、再生有機認証です。USDA有機認証は、水耕栽培でも放牧していない乳牛、屋外に出ない鶏も認証可能であるため、土壌との結びつきやAWを軽視した有機が広がり、中小規模農場の存続が困難になっているとの意識から「リアルオーガニックプロジェクト」が進められています。また、土壌の健康とAWと農場労働者の公平性という三点を軸に、コミュニティと生態系を回復する食品システム構築を目指した「リジェネラティブ有機認証」が始まり（図3）、こうした鶏卵は自然食品系小売で1ダース11・99ドルで販売されています。

三つめは、早くからPR鶏卵を生産しているバイタルファームズの動向です。「リストレイティブ（回復的）

農業」として、動物と土は一緒にいたほうが良い (Animals & soil are Better Together) とうたい、土壌と動物を一緒に育てる生産に取り組み、1ダース10・49ドルで販売されています。そして、ヴァイタルファームズは、2023年には5200カ所の拠点を持つ食品流通企業と提携し、それまでの60万羽から570万羽に急拡大しました。工業的有機にはネットワーク化で対抗するとうことかもしれません。

いずれもこの5〜6年のうちに始まった動きは、工業的農業を「ビッグアグ (巨大農業企業)」と批判的に捉え、それに「スモールファミリーファーム (小さな家族農場)」を対置しているようです。それらを記載した商品もあり、米国の工場的有機畜産に対する批判が見取れます。

\*7 全米の州ごとのAWの取り組みは、「畜産の情報」2022年8月号に詳しい。また有機鶏の詳細基準はa-i-c, USDA, オーガニック畜産物に係る基準を改正する最終規則を公表、2023.12.8に示されている。有機の採卵鶏1羽当たりの最低スペースは、屋内1393cm<sup>2</sup>、屋外2787cm<sup>2</sup>となった。2024年より施行。

飼養スペースは、白色の採卵鶏では432cm<sup>2</sup>、茶色の採卵鶏では555cm<sup>2</sup>で、それぞ未満であってはならないとされる。ケージフリーガイドライン(2024年版)では、多層の場合、1羽当たりの飼養スペースは、929cm<sup>2</sup>未満であってはならず、止まり木、敷料、巣箱などの設置が必須で、照明時間の規定もある。なお、多段システム(エイビアリー)における「コンベ」「ハイブリッド」タイプ(各段に留められるように扉が取り付けられているか取り付け可能)タイプへの言及はない。

\*9 統計はUSDA AMS' Egg market Overview<sup>10)</sup>ではアジア系、ラテン系に強い小売と超高級系小売を除く

\*10 CFATC (2022), Commodity Fact Sheet Eggs information compiled by the California Egg Industry Association

\*11 Kroger, Animal Welfare Policy, 2022.8. この文書では「コンベネーション・ケージ」と呼んでいる。また、Animal Welfare Update, 2022.8では、2025年までの目標達成は難しいが、2021年まででケージフリー以上の卵は、販売額で45.9%、数量で27%になり、2030年までにケージフリーを数量で約70%にするため、4500万ドルの投資を見込むとしている。

\*12 2024.1.3 Cal-Main Foods Reports Results for Second Quarter Fiscal 2024 ほか、「鶏鳴新聞」2024.2.15、米国ランキング(エッグインダストリー1月号、2023.12.31現在)

## 2. まとめー考えるべき点ー

以上、紹介したように、特徴として次の四点を指摘できます。

◎ ケージフリー (CF) 化による

フリーレンジ (FR)、放牧 (PR) 商品の定着

◎ CF卵の競争と低価格販売

◎ CF卵生産の進化

◎ 有機を含む工業的畜産への批判的動き

### (1) 需給見通し

指摘したように、ほとんどの小売でCF卵がPBとして販売されています。これは、大手鶏卵生産者(企業)が生産体制を整えたことを意味します。大手の動向は、前述したカルメイン以外にも企業ごとに分析を必要としますが、社会課題は、AWに照らして適正なCFとは何か、自然(土壌)や働く人にとつての適正な畜産は何かという点にあります。それが、「ケージフリー+屋外アクセス」であり、「リジエネラティブ(再生可能)」へと展開しています。

では、私たちはこの動きをどう捉えるか。まずは日本と違う動きが起きていることを理解した上で、日本の鶏卵生産体制を振り返ることが必要でしょう。2024年3月の日本養鶏協会推計<sup>13)</sup>では、2030年の国内生産量264万トンに対し、国内

消費266万トンを見込んでいます。しかし、いずれの数値もやや根拠が弱いように見えます。過剰なのか不足なのか精査する必要があります。

その上で、CFをめぐる国際的な大きな流れを踏まえた適応方策を検討する必要があります。

### (2) 統計整備

適応方策を考える際に必要なことは、データに基づく現状把握です。緊急を要することは二つあります。

#### ① 飼養法別生産割合(数)の把握

飼養方法別生産割合は、専門家を含めほとんど国際卵業協会(IEC)による数値5.9%(平飼い5.6%、放し飼い0.3%、有機は空欄)を使用しています。しかし、これは公的統計でなく、IECレポートの「推計」データで方法は非公開です。養鶏関係者から「もっと少ないのでは」とか、筆者が首都圏のPOSデータを利用した推計では、2021年10月時点で金額ベースで2.5%です。価格を仮に2倍と仮定すると数量ベースで1.3%程度となりますが、これには生協などの宅配事業者の数値や、インターネット販

売などが含まれていません。また、NPOアニマルライツセンターが2023年10月に公表した調査結果<sup>\*14</sup>は1・11%で、IECによる5・9%と大きな乖離があります。現状の数値把握はきわめて重要です。

## ②飼養実態の調査と把握

(公社)畜産技術協会が「採卵鶏の飼養実態アンケート調査報告書」を出したのは2015年3月(調査は2014年8月)で、ほぼ10年を経過した今、改めて飼養スペースなど実態調査に基づき、適切なロードマップを作成する必要があります。

## ③販売における消費者理解の醸成

米国や英国で卵売場を見ていると、モールドパックの場合、蓋を開け身を確認して購入する消費者を頻繁に目にします。殻にひびきがないか確認して買う自衛的行為です。生産から小売までの流通全体に関わるので一概にその消費者行動を評価すべきではないかもしれませんが、日本には、モールドパックを開けて確認することを控えるよう求め、見たときは店員に声をかけるよう売場に貼り紙する高級スーパーもありま

す。人の手に触れる衛生リスクと、パッケージ破損リスクを避けるためとされますが、消費者の畜産物への関心・理解を喚起するには、確認行為の抑制は必要あるのでしょうか。

## (4)大手主導によるAW商品市場形成への懸念

米国では、有機・AW商品が大手企業によるものが多く、工業的な有機・AW商品への反発が起きています。日本でも同様の懸念があります。鶏卵は装置産業ともいえるため、大手の資本力でAW、特にエイビアリーの参入が考えられます。日本では、「エイビアリー」は公正取引協議会でその旨の標記が指示されていますが定義が明確ではなく、専門家により見解が分かれるようです。加えて、コンビやハイブリッドを使用するエイビアリーも存在することから、採卵鶏飼育の最低基準を含め、平飼い、放し飼いなどの詳細基準を定めることが必要ではないでしょうか。現状、平飼いは「鶏舎内又は屋外において、鶏が床面又は地面を自由に運動できるようにして飼育した場合」との規定のみであり、前述し

た畜産技術協会のアンケートでは、平飼いでも1羽当たり550cm<sup>2</sup>未満が37%(無回答を除く)を占めていました。

大まかな規定の下で平飼いを比較的自由に名乗れることの問題は二つあります。一つは、適正な平飼い卵市場の立ち上がりが困難になること。もう一つは、市場で一定シェアを占めたブランドの飼養方法が事実上のスタンダードとなるリスクです<sup>\*15</sup>。日本の現状は平飼い市場を立ち上げが立ち上がった後で定めても良いとの意見もありますが、米国有機鶏の詳細基準策定に当たり、市場縮小を懸念する声が業界を中心に強く、一度基準が取り下げられ、約7年を経過してようやく設定されました。これまで連邦有機食品法施行以降、20年以上にわたり詳細面積基準なしで有機鶏卵・鶏肉市場が形成されてきた米国の経験<sup>\*16</sup>を、日本は教訓とすべきと思われる。

\*13 日本養鶏協会、鶏卵の需給見通し、2024.3による。この中では、2023.9の需給見通しと比較して、鳥インフルエンザの影響による需要の戻りが遅れているこ

とから見通しに変更が施されている。2023.9から2024.3での見通しの変化は次の通り。国内生産量270.9万トンから264万トンに6.9万トン引き下げ、1人当たり消費量22kgから21.0kgに減少、国内需要265.4万トンから266.0万トンに微増、輸入11.5万トンから9万トンに増加させている。ポイントは生産を国の生産努力目標に合わせて下方修正し、輸入の減少と輸出の増加で、大きな過剰を回避する見通しとした点にあると思われる。それでも、2030年には「供給量が需要量を約11万トン上回る見込み」との推計である。気になる点は、この供給過剰リスクへの対応を含む「今後の課題」として述べられている6点の細部を見ても、AWへの対応方針がまったく述べられていないことである。加えて、この見通し委員会の委員名簿には、一部の学識経験者を除き、消費者が含まれておらず、飼料・生産・加工業界の見解、認識を超えていないと思わせるものであり、かつそれら業界はAWには消極的であると印象付けるものとなっている。

\*14 ARC、日本のケージフリー飼育の鶏の割合は1.11%。ケージ飼育が98.89%(2023年調査結果)、2023.10.25

\*15 元(株)アキタフーズ代表が2023年11月の新聞インタビューで、エイビアリーと述べる農場の鶏卵はエイビアリー表記はなく、問い合わせにエイビアリーではないと公的機関は回答。また、放し飼い規定がないため、屋外アクセスの有無や面積を示さず、放し飼いと表記する鶏卵も複数ある。また、有機鶏卵は屋内/屋外それぞれ1500cm<sup>2</sup>/1羽とされているが、合わせて1500cm<sup>2</sup>という運用例もあると聞く。鶏卵表示は現状でも「混乱に近い」と理解できる。

《次号へ続く》

